新局玉石童子訓

巻十七

1279
32

1279
3

新局玉石童子

東都　曲亭主人口授編次

第四十七回　七鹿山の厄ふ四少年禍福を異ゆを　千仞の谷の中ふ神霊新奇を出現を

重説大江杜四郎成勝峯張楽六郎通能ら無名山又七鹿山の巓ゆ。
後として来ぬる若黨奴隷字六可平号を俟んとを土地の茅社の頭ふ權
且憩ひ居る程ふ突然とあて暴来ぬる正ふ両箇の矢傷野猪其形容
犢ふ〳〵〳〵て駈んと狂ふ勁猛ふ當るべくもあらざれば吐嗟とを左右へ
別避て寄らぬ刺んと身構ふる程〳〵もあらざ前向ふる。敏捷ふ樹柱の
蔭よりうして弾と射出ぐを二條の猟箭ふ野猪ハ甲乙共ふ窮所を
鬼深く射串れて四足を張てぞ斃れける。當下成勝通能ハ思ひうけ

ゐる光景ゐ。是へいらゐゐ。とぞりゐ。其方を伝とうち見る。件の樹蔭ゐ
両箇の武士あり。倶ゐ吟ぜる聲朗ゐ　鰐角へ木ぬまとむと足曳の。
山の幸雄ゐ逢ひゐけるかも　萬葉集巻の三　ゐりや両才子訝りのゐる。我们
前より這里ゐ在り。出て意衷を告んぞと呼びつ。徐ゐゐ立顕れつ近
つ来ゐるを。と見れば是別人ゐ〜ぞ佐々木家の近習ゐりける長橋伐太郎
勢恭象舩美弥知量。是怎生打扮ぞ但見身ゐへ鞋肚甲手脛衣長總
垂ゐる鎧衣の上ゐ段々筋の夾衣の裳短ゐるを被下しつ腰ゐへ苛物作の両
刀を跨へて背ゐ駝鳥の羽の猟箭も亦是一對ゐ各重藤の弓ゐ関
弦張ゐるを挾を頭ゐ戴く綾藺笠重裡ゐる戰鞋の締附の紐も夏挽の。
麻より直ゐ顕義ゐ列〜奈須の條原猟銷〜ゐる那三次ゐゐ〜ぞせ。
冨士の御狩ゐ寃家を撃ゐ。曾我兄弟の後身歟と思ゐ可の両少年。

這山中ゐ駆ひて。有斯ゐ資助ゐりけるを神ゐ〜ゐ身の知るゐ〜も
ゐ成勝と通能ゐ疑の霧ゐ〜ぞ霽れば共侶ゐ聲をうけて思ひ出ゐ両
賢知。這里ゐて對面ぞ〜とゐ故ゐ〜ぞ。と問へ勢恭知
量へ舎矢ゐ〜倶ゐ〜ぞ。已べゐ〜ゐ秘密の話説是あれば。
世ゐ憚りの関ゐゐ人迹稀ゐる山路ゐりて這頭へ樵夫旅客の過る者
ゐ〜ぞ這方へ来ぜと先ゐ立ちて件の某社の背ゐ樹下ゐ退ゐ。
各株ゐ尻を相ゐる。斉ゐ中ゐ成勝通能へ勢恭ゐゐ向ひて料らぞ野
猪を射て斃され歓びを演ゐ〜ぞ知量急ゐ推禁めて多よ両〜目
今火急の密話ゐ。他談へ要ゐ〜。先叫の〜ゐへ勢恭聲を低めて和
君等の〜ぞ悟〜ぞ我们今朝より這里ゐ在りて和君等の過るを俟〜
野猪を射ゐ為ゐ〜ぞ守の密意を受ゐ人ゐ知らぜ内緩ゐを遠

前ふかけん為ありたとのゝ呆るく成勝通能憶ぞも面を注して沈吟ぞること半晌許思難へ俱ふのゝ言疑ふふあるねども我们犯せる罪あるぞ然るを亦何等の故ふ悄地ゐ誅せと宣ゝせ。守の御意さのとまくろ汐られね。刎又ゐ等へ君命を兼ゐ。我们を射て仆さで反て両箇の暴野猪を。前頭ふゝのゝ〜ハ甚怪ぞや。と詰れば勢豪四下を見かへり。然れども其るゐれ約莫這回の殃危ハ一朝のまとゐあるぞ。去歳の九月十五日ふ衆少年の試驍の折ゐ等ゐ両箇の弓馬槍法彼未朱之仗ふ十倍せる。本事を我君賞感のあまり。高禄をのて當家ふ留めて。ゐで家臣ふ做さんとてみづゝ懇命ありゝ時ゐ等ゐ固く辭ひまゐりて留るべくもあらざりけれバ守ハ為ゐ〜思絶て重て御沙汰ゐゐゝ〜ふ近習第一の嬖臣ゐ。曽根見五郎平宗玄ハ能を忌才を媚こ已ふ優れるを欲バ

ざる。奸佞利口の癖ゐれば。悄地ふ守ふ稟ぞゝ。彼大江杜四郎。峰張米六両少年ハ必是隣國の間者ふ。其故ハ君今他等ふ大禄を食ゐて留めまく欲しゐを固く辭ひまゐりゝハ心ふ一物あれば。目今悄地ふ斬て棄て禍根を断ゐるぞハ。御後悔のやゐん。と真実て呼紀稟ぞ。守ハ半信半疑して沈吟ゐ宜ふ汝の先見故ゐ紀ふあゝ彩ゐまゐ正しゐ照据を汐ぞて。叨ふ他等を誅しゐ。石見ゐも怨むべく。州民並て我疎忽を識るもあゝ。隣國の為ふ〜も笑れん。誅戮の弱ハ急ぐべからざ。汝の義ハ汝ふ任んぞ。他等猶ふの地ふあゝ陽ふ親〜交りて密々ふ心を屬よ。他等果して隣國の間者てふ照据あゝ。其折ふ汝も誅ぞべけれゝ。せよふ。と課されハ宗玄ハ忻然と羨りてぞ退ぞる。是等の秘密を始より。知れるハ咱等と弄弥のみとのゝべ知量其語を次て。然ゐ程ふ和君等ハ。

刀子紛失の故をもて。逗留久くする隨ふ又彼曽根見宗玄ハ我們と共
侶ふ高嶋許交加て。和殿等の隙を窺ふふ證据とせ〻ようもるく。
發足近紀ふありと答へ〜かべ他其言の錯へるを。朽惜くや思ひけん。
君命と詭りて時ふるゝ鮒を贈り〜ハ毒を飼〜ゆゞあ〜むぞん。然れば
ゆや和殿等ハ食傷の病厄あり。命も危ふりけるふ幸ふ〜て死ふ至らゞ。當
春産り果〜かべ宗玄ハ猶懲ぞまふ猿婦巨楳のまを借て大江主を結果
けんと拙く計較り〜ありて彼拘杞村の巨楳ふ。悄地ふ多く錢を取せて唆誘〜
なりけるべ巨楳ハ是ふ勢凶て。大江主を寃家と〜怨て狙撃まる〜欲去
〜ふ。曽根見が拙策行まゞ巨楳ハ反て狂乱て許多人ふ傷け〜かべ彼
身ハ當日拘杞村ふる莊客們ふ撃殺され和殿等ハ異ふるるる〜。俱ふ初
髻の祝義を果〜て他郷へ立去りゆふ其義を早く知りたる宗玄弥

娼く思ひて猶悪心を改めゞ詭〜て守ふ禀生ゆう。曩ふ多ゆえまりり〜如
く。彼杜四郎楽六ふ敵の間者ふ疑ひ〜。然る故ふ彼奴ハ君の御懇
命を辭ひ〜ゆ〜久くゆるまで立去らゞ。去歳の冬ハ杜四郎の刀子紛失ふ假
托て夜々城外へ立出〜ハ地理要害を探んゆゞその折毎ふ石見仗ふ生て
案内ふ立めゞと悄地ふ臣ふ告る者あり。然らば石見仗ふ隣國へ内
応のあるある欤是も亦知るべ〜ゞ。かて今茲の春ふ至りて杜四郎楽
六ふ屢〜近郊へ立出て故もの〜莊客毎ふ物を多く取ると〜ゆえ〜とり。
是も亦所以あるべ〜。ふるふ昨日臣ゞ腹心の者越前より〜かり来て那
里の消息を告るふより思合せゞかべ彼杜四郎楽六ふ。朝倉家の近習
ゆて其性怜利紀のゆ〜ゞ。武藝も人ふ勝れ〜れば俱ふ間者ふ立られて。
當國ふ来て八九ヶ月。御方の強弱地理難易を。密々ふ探者ゞ。然れば

さてあれ彼奴等は明日當國を立去りて越前へゆくとかいふなれど還るに倘這時を喪ひて彼等を放ち遣りあらば後大なる患を做さん彼等が封疆を出ざる間に弓箭に勝れ近臣に課て途に埋伏させて射て捕せのちぞ御後悔もあらん此の義を思召れぞや。と咤泥稟を便佞利口に守に竟に説惑されて驚馬泥のごとく大かたのもぞ汝の忠告其意を汲さり何人を討ふに遣せべ泥とそその人を擇をのの程に憶ぞ彼餘殃遂に我身に及ぶ泥と告れば勢豪も俱にのの彼宗玄が非義の伎倆をよく知れる稀なるに咱等と美弥は始より彼が肺肝を拷りて汲さるは亦是故あるか。曾根見は浮薄の小人なり。能を忌才を媚と人を損ふべ泥者なれども。彼が女兄なる窓井の方は守の年来愛のふ隨一の嬖妾なれば宗玄も亦此頭に言聴れぞとの者なり。さてを始より。彼が和殿等両才子の人に

勝れを忌嫌に其機を早く猜きしかば後竟に苗害を釀すこと疑なん欤と思べ美弥と謀合して陽に彼と同意の如く萬事隔なくものせしかば宗玄ぞうく心寛して機密を咱く折もあれば。その大男を知る足れども。毒殺のみ。巨棋のみは只我が推量のと正可に咲く開を和殿等に云云と咤泥告んいさぞ。まろ苦しく思ひしに幸に免れのひに寔に自他の歓び然るを昨見は思ひ寄るに我君の御意として臣と美弥を閑室に召よせて課をるよりあり。且宜なり。ぞくに彼大江杜四郎峯張楽六郎は明日の旦に當所を去りて越前へ還ることなり。彼等は明倉の間者にて當國の強弱を拷べ為と正可に告る者あるべ捕せて誅せるとも。けしからぬ。然りしては又隣國に怨を結ぶに似て妙なるぞ只其去向に埋伏して射て殺せに如くいざ。彼等

鹿山をうち踰て越路へ還る。慥ふゆゆぬ彼山ゆい木立多り。一人是を守る時ハ萬夫も拔をがたしとゆふ蜀の棧道ふまを及ざるも。進退不便の切所多り。汝等其頭ふ埋伏して彼等ゞ来ぬるを俟るべ。是究竟の地方なるべ。目今まの美を課せん者汝等両箇を除くの外又あるまじ。もちろんえ勉やよや。越やよや。と亦他事もなく仰げる。思ひ設けるまと。あれば美弥も俱ふ胸を潰して咎亶さん所を知らぞ。彼宗玄ゞ誣言なる。いかでも為ぬるるべ。和殿等ハ我小父なる。石見次の師と一憑。峯張叟の外孫なり。二郎と已等も。豫ゆの知る所ゆ。出處来歴分明なれべまの美を具ふゆゆえ上て諫ならゞや。と思ひ一かども。守ハ既ふ佞人ふ説惑られのひたる。痼疾膏肓ふ入り一上ハ良藥諫言西なるべ。いふふ一て聽るべ。況我们ハ弱冠ゞ身の程を一も揣らぞ一て虚実を亶ふ解んとて反て不測の

罪を冒ぶ事ふ益なるべのまなるゞ必亦別人ふ課せて和殿等を射まるべ。只然と氣なるく美まるて。悄地ふ救ふふまくとあるべ。と立地ふ深念考。蝉く美弥ふ目を注せて事情を冒さまるべ。俱ふ額衝て亶まるる。御諚かゞとうも兼りゆひぬ彼杜四郎栄六郎等の事の虚実ハ知らぞひとゞる。何でふ尊意ふ背くべ。明日倘鏃ふ血らぞハ徒ふ還りゆべ。まの美御心安るべ。と齊一応亶ま一かゞ。我君欣然と頷べて然るまそあるゞ人ゞや知らん。疾々立弦とゆもゞ一ゆべ。躰て御前を退出ふ。とゆふ言葉の數敏べ露の情ハ一對なる。知量る亦嗟嘆して。夏の難美ふ我们ハ密談一ても蒼柴のまるゞりゆて盃あるぞ非如君命なれべと罪もなく怨なるべ良友知音の和殿等を。射て殺べ。と前ハ。所詮彼山ふ俟着て密議を告て救ふふまるゞ。と稍商量を果る。

今朝より這頭ゐ俟さる甲斐ゐ。料らぞも矢傷野猪二頭を射て斃ま
しゝ。昨日守ゐ誓ひ稟ま〜。正ゐ鏃ゐ畝の美ゐ稱ふを一奇とのまくのみ。
嘗笑く。ま〜の山ゆ。老さる大鹿七頭あり。ふくをりて土人無名山の和訓ゐより
て。七鹿山ゐ作るもあり。鹿を志と唱るよりゝ兎道の鹿飛の例ゐ由るのみ。
其鹿ゝ人を害せぞ又這山ゐ暴野猪多り。開ゐ究りて怕ゑ〜。豫ゆ〜ゐ
違ざりゐと解を勢業推禁めて他談ゆ要ゆ。時ゆ穆らん。爲ゆ大江主峯張
生多蘇く這山を下り果て討ゆの征前を免れのゝやよとくゝとのそ〜たる。鬼神
不測の一搗撃ゐ成勝と通能ゝ笑くるゆ毎ゐ駭嘆ゞて。呆る者半晌許慨
然とゝて俱ゐのゐゆ。ゐゐ覚ゐゐ枉津日ゝ何等の神の祟ぞや。倘和君
達微りせゞ我们両箇の白骨ゝ射狼ゐ〜も喫残されて。這頭の草を肥
さんのみ。昨ゝ文武の詞友〜り。今ゝ命の親と〜も。仰ぐゐ猶餘りあり。供

恩徳美ゝ千萬言もて謝るとも盡さぞ。願ゆ異日再會して報恩の時
を俟んのみ。今ゝ餘談ゐ暇ゆ。然らば教ゐ從ゆ早く這山をうち踰て他領へ
走らゞ安りてん猶心許ゆ。猶の上ゆ。非除鏃ゐ畝り〜とも已ゆの
首を切捕らぞ徒ゐ還りまりゐ。罪ゐ加まりゐ所為ゆ〜ぞや。と主僕齊一
陪問ふを勢業知量ゆ。あゝぞ其美も豫商量まり。我们這里より加
まりて反命〜まりんをり。首級ゝ甚麼と問ゆ。然ゐ杜四郎と楽六ゆ岨
路偽ひゐ来ゐけゐ折射て仆〜ゆゝ彼ゆゝ悩ゝぞ幾百文ゆ。谷底へ滾落
ゐゐ。ゆの故ゐ他等両箇の首ゝ切捕らぞゆ。必や岳ゐ砕けて骨も
續ゆぞりゐけん。別ゐ仔細ゝいらぞと稟さゞ障りゆるべ〜。是等の
ゆとゐ掛念せぞ。ゆ〜〜影を躲〜ゆ。やよ疾々ゆそぐゆる。人の誠ゐ
成勝通能盡ぬ詞も火急の別路共侶ゐ身を起ゆ折〜。後ゐ繁ゐ樹

殺伐を恣ふして
奸佞四賢士を
搦捕まくった

柱の蔭より吐と揚げる関聲。谺ゐ響いて駭〜く山も頽る可き勢。
勢叅知量成勝通能。俱ゐ吐嗟と驚いて其方を佐と見久れば顕れ生
来る緝捕の頭人。是則別人るらず。曽根見五郎平宗玄之頭ゆへ鋭粉
磨ゐ鋭輪打せ〜。戰笠を戴いて勒胜戰外套朱鞋の両刀苛
め〜〜。縹縋紐子の野袴を鷗尻ゐ穿做ち山路の嶮岨ゐ叅熟たる。
望月の景駒ゐ鐵子を掛て腰ゐうち跨り。ゆへ角弓三羽の征箭握り持
る左右ゐ従ふ其隊の雑兵三十餘名。彼字六と可平を緊〜く結扭りつ
牽居て惴雄の壮校毎十ゑ捕縄捍棒又各ゑゑゐ打振々前後の
路を立窒いて漏さ〜とて捕巻る。當下宗玄聲高ゆゐ呼ゐ
賊勢叅知量若们君命を兼ゑ〜。敵方ゐ内応して機密を洩せ
もやあらん。と豫思ひ〜もあれば我又守ゐ吟え上て隊兵多く假〜ね

り。迹を跟ゐ陟り来ゐける。路ゐ石見ゆゐ若黨字六と奴隷可平を生
捕りて其来歴を責問ひ〜ゐ我推量ゐ多く違ゐぞ。杜四郎栄六ゐ。逃
脚の速いさらへ若们ゆゑの山ゐ必在んと思ひ〜かへ。嶮岨を戰つゞ急
いで来て那里の茂林の樹蔭より。其為体を張ひ〜ゐ若们果して貳あり。射
て捕るべいた其両敵と幾の程ゐ欲通同して密談數刻ゐ及ひ〜を反逆ゐ
らぞと孰欲ゐふべいた天罰今ゐ脱る〜路ゐ。杜四郎栄六と俱ゐ馬前ゐ跪
いて。縄を受よと呼ゐ。勢叅知量怒ゐ堪ぎ弓前搔今り疾視く。
君を惑ゐ奸悪人賢を憎て才を媚て舌の剣ゐ人を損ふ。當家の蠹毒。
不忠の本性人皆是を知ることゐ。或ゐ禄の為ゐ口を鉗て。或ゐ其職ゐ
ざれば守ゐ訴ゐふ〜あ〜て今這時ゐ及べいゐ其身の僥幸ゐ。雑兵
さへゐ駈催〜来て君を非道ゐ陷れまり〜。欲ゐ〜ゐ〜ゐ。大江峯張両

才子ハ高嶋生ふ舊縁あり。生處来歴正しを。敵の間者といひ做しなり。その罪死刑ふ當るを知らぞや。今ハも綫しかとり。君の為ふ奸を鋤く。勢柔知量ら忠義のまたでめ今その頭を斬落さん。開里ふ退とといへども果ぞ。宗玄眼を瞋らそやそれ兵毎腮喰せる網裏ふる四箇の罪人滅ぼな。捕捕らぞやと劇きて下知れその隊の雑兵兼りねと応も果ぞ。俱ふ十を刺を閃めきて組んと找むを勢柔知量持る弓を撃仆し。敵に伏つ挑を立。然しも劇きて爭ふ成勝と通能へ料らざりける再度の窮阨今宗玄を見て怒ふ堪ねど一言半句の問答ふ遑わべて時宜るるねば群立競ふ雑兵を當るふ儘せて投蜚を白打の精妙向ふ前る。輒路を開せて透あるべ宗玄ふ組んと思ふ程しもわるもぞ。曽根見ハ馬上ふ弓ふ箭刈ふて克弯固めて弾と射る。箭局狂ふて一箇の雑兵項を射られて仆れ

ける。既ふして宗玄ハ一の箭を射損ねて反て彩方を傷りしかべ心慌て第二の箭を刺んと若ぬる程ふ長橋侍太郎勢柔ハ競ふ緝捕の雑兵を中るふ儘きて撃散せべ。衆口嘩叫ぶのを重て蒐る者もるる其間ふ勢柔ハ弓箭を取て弾と射る。那時遅し。這時速し。寛錯ぞ宗玄ハ左の肩尖を昆深く射られて弓箭を捨つ仰反て馬より樓と墜ぬ。是ふぞ駭く緝捕の衆兵右往左往乱噪ぐを威勢剛しる大江峰張象船知量共侶ふ敵の捍捧曳を繰り。息をも艱れぞ撃悩せべ。衆兵いよ〳〵度を失ふて或ハ深谷ふ滾落て死活も知らぞるるもあり。その他ハ山脚へ辟と衝て落て身を傷るも多しり。斗ぶ中ふ猶幸ふ辛く命を免まて。當日城内へ還りしハ五六名ふ過ぞといふ。その後ふ聞えけり。是より先ふ勢柔ハ曽根見宗玄を射

て落して起んと蠢く程もあらせず起蒐りの頭髻を抓て地上ゑ
楚と推伏て怒まる聲高ふ。されば宗玄若が奸悪。今復數まえ
らるゝを及ばず。大江峯張両才子の其名這里へもゆえよる。古人峯張
先生の親族ゑて。高嶋主ゑ由縁あり。生處来歴分明なるゑ敵の
間者とらへ做して守を惑さまる。其罪死刑ゑ當とゞも。彼儘ゑ
して在るゑべ猶幸ゑ免れんゑ我们を疑ふて。ゑぶくゝ跡を跟て
来て搦捕まゝ欲まる。奸曲既ゑ極れり。我们素より不忠を存ぜず。
大江峯張両才子を救ふ守の御恠を。悄地ゑ神まる。是則忠之義
之。然れども事の敗ゑ及びて亦今さらゑせん術なし。禄を棄命を棄
て君の為ゑ奸を鋤く。勢桀が鯓義の刀尖思知るやと罵り責て。腰
なる短刀拔出まつ。宗玄の項より吭を掛て禹然と刺を。刀尖土中ゑ入

るまでゑ鮮血濺と濆りて。开が儘息ゑ絶ゑけり。浩處ゑ象船弄弥大
江峯張両主僕へ。逃る緝捕の衆兵を追捨てかゝり来ゑ。今ゑの事の為
体ゑ主僕吐嗟と驚呀て走近つく聲もひらく。ゑよ惱りまる。長橋
生宗玄奸虐ゑりとらへゝ。亦是守の使ゑるゝぞや。そを我们の故を
もて。卒介ゑ撃ま果してゑ罪免れがたけん。ゑの義甚麼と悔
問ふを。知量急ゑ推禁めて。介思るゝへ理りゑれども。愚意も長橋
と異ゑるゝぞ。宗玄守の御使とも。行ふ所ゑ正路ゑあゝぞ。然るを
今撃果さぞへ。彼が為ゑ征せらて。俱ゑ悪人のゑゑ死ゑんゑゑ已
まとを汚ざる而已とらへ間ゑ勢桀へ刄の鮮血を推拭ふて。开頭ゑ
牽居置れゝる。高嶋の君黨勾津字六と。奴隷可平の索を斫棄
て。嘆息まつ却のゑゝ。汝等又蟲く。城内へ走りかゝりて。我等ゑ為ゑ小父

ふ告よ。今日筭弥と共侶ふ大江峯張を射て殺さぞ反て悄地ふ極ひ
おふ亦是君の御怨を補ひまうる為うまども。其事竟ふ合期せぞ。
曽根見宗玄ふ跟られて妻勢を敵まふ血戰おつ。射て宗玄を殪
おーふ只是一時の怒ふ儘ーて私の怨ふ報ふふあらぞ宗玄ふ佞人
之守を惑ーまる。奸虐既ふ極まり。今他をーも撃まぞもあらば。
孰の時ふ悪を除ん。我と筭弥が本意うまども君の仰ふ由るふ
あらねば。俱ふ罪を免まかーうり。おの故ふ自殺ーて身ふおの山の土ふる
りてん。筭弥も同ド意うべー。我と筭弥ふ幸あらで父母早く世を
去りて。胞兄弟もう親族寡ーー。年来小父ふ後見せられて成長うるのー
うーぞ兵法武藝何ふまとうー教を兼ーー甲斐もあらで小父さ連
累せられん欲と思べうる身の後まぞも。心苦ーー涯りうれども今おも

せん徒ふーー。おの意を備ふ偽よかーー。とらひつて又短刀をもて。髪の
毛を前方倉りて。そを鼻紙ふ巻籠て卒とそ渡せば知量ふ嗟嘆
ふ堪ぞ俱ふのふ。我も亦幼稚ふ時より。高嶋大人ふ教育
せらまて。今日ふ至りおふ其報恩の折もうーー忠義の本意も空
とうる。身の薄命を爭何せん。汝等宿所へ疾かりて高嶋大人
ふ言偽せよ。とのひつ小指を二三分許噬斬りつ流るー鮮血と。俱ふ
懐紙ふ裹て是を字六ふ遞與ーて又ふふう。汝我們両箇の為ふ。
大人ふ言偽致をとも。照据うーーふ疑れん。長橋の髪の毛も又我小指
も肉身うれべ末期の像見と思うるべー。約莫今日の禍事ふ汝等の
知る所亦今さらふふふーも及ぶぞ。おろ汚さる歟。と説示おーー。腰ふ吊た
る藥籠より。高嶋家偽の仙丹を撮出おーー小指の疵ふ。塗れば其血止り

て。疼痛もあらぬを做まるゞ像し。當下長橋勢業い成勝通能ふうち
向ひて両才子是まで志い致たり又蛾く他郷へ走りゆ我们主君の凶
為ふ。今奸悪を除くとゝくゞ。更ふ違命の罪を怕れて。倶ふ他郷ふ亡
命せば忠も不忠とゝいまんのを既ふ覚悟い極めさり暇禀をとゝ仏も汐
果を程遠くぬ千仞の谷へ投るゞ像く身を墜せば知量も亦後れゞとゝ。
倶ふ深谷へ陥りける。是ゆゞ驚く成勝通能又字六も可平も吐嗟とゞ
くり呆れ惑ふく立て見居て見指視く。底最間ゆ千仞の谷へ落たる
人を譬れば索の絶さる吊桶ふ似さり。孰ろよく是を極ん。唯弥陀
仏弥陀仏と唱名の外ゆろりける。そゞ中ふ成勝通能い惆然とて嗟
歎ふ勝ゞ。姑且て倶ふ帰ゆ。我る我長橋象船尚少年ふて烈
氏の風あり。善ふ與まるゆ。水の低ゆふ就くゞ如く悪を憎むゆ。頭の蜂を拂

ふふ似て了。難ふ臨て苟も辭せゞ。身を殺してよく忠あり。在昔唐山
漢楚の時彼韓信ふ路を詢。蘆中人の我侠とゝふとも。豈這両義士
ふ及んや。惜むべく。とゝひつ字六を見くりて通能先ゝ仏けゆ。汝
這里ふ在りても孟子。疾城内ふ還りゆ。高嶋主ふ注進せよ。言後と
て告ぜるゆゞ彼人是非の境ふ惑ふて連係の罪を免れゞけん。とく
ゆ仏。と急せば成勝も倶ふ仏ゆ。長橋象船の今日の所行い忠義の為
とゝひゆゞ。原是我们の死を救ふふあり。然るを彼両義士い身を殺して
潔ゆ終をも示されふふ我们主僕い倶ふ死ゞ這儘他郷へ走りゆ。
信義両ゆゞ。欠るふ似れどゝふふせん。舊里ふ親もあり。胞兄弟あり。孝
ふ百行の本ふて亦唯是より重ゆふ。今交遊の為ふ死生を隨
意做くゞゆ実ふ是等の故るを。高嶋主ふ知られやせん。ゝゞふ義を

倩よかーとらられて字六可平ハ額を衝つ答るやう。御意兼りのハね。鄙ハ
後れて来ぬる程。曽根見主ハ撞見して。情意もらせぞ搦捕せて這頭へ
牽れて行る時ハ生たる心地せざりーハ各位ハ救れて欣ぶ甲斐も愁ハ曾
根見主さ衆兵さ。撃果されて横長橋象舩両郎君ハ這里の渓水
ハ身を投のハ是等の変の大変を早く主人ハ告ぞもあーべ。後難測
かーるべー。ハ思ひひとど。各位の巳先途を見果ぞーて退りるべ主人の
本意ハ違ハ似たり。進退谷りひひぬとらべハ亦可平も。然容々とぞら
りハ困じて俱ハ立難るを成勝通能安あーぞ。开ら亦益るを口誼。
汝等ハ長橋象舩の送言をーも憑れーハ一要時も這里ハ猶豫せるを
かハ我们の上ハ安られ山を下りて他郷へ走らん。疾つるぞや。と焦燥ハ字六
可平辭ハハ由る。揉ぬを走く身を起ーて。ぞらんぬ是非ハ及ぶ巳意ハ

従ひぞらん。ぬ別ぬらを惜けぬとらべハ通能聲奇立て。开らぞらるたり。
疾ぬを行ぬれーと憤立れべ字六可平応をぞる。故来ーー山路へ下りぬ。
背影の見えぞるまで。這方の主僕ハ目送果て憶ぞ嗟歎ぞりける。
姑且ーて成勝ハ通能と談ぞるやう。長橋象舩両義士ハ我们の死を救ひ
ーより。彼身を潔くせんとて俱ハ渓谷ハ身を投ーハ其亡骸ぞも見ること
なく。這儘ハーて山を下らべ。情義両ぞる恥ざんや。能ぬまでも底を探り
て。索ねて見ぞや。誰何ぞや。とらべハ通能沈吟ーて。然るり。古語ハ孝子ハ巖
墻の下ハ不立とらり。親胞兄弟の為ハーも身ハ大事を帯ぞるーハ武士一
時の義の為ハ危を忘るハ好ーかるぬ所為あれぞも宜ハ所寡ハ所なり。藤重
ぞハ捧りて下らる便宜あらし秋底の深さを揣りて見てん。卒とぞらべ
共侶ハ峨の頭ハ立寄る折ら。怪むべー。谷底より。白雲忽焉と起立て。

這方へ靡くと見る程ゐ。犢児ゐ号紀大鹿二頭四月の今もまさに解は。
角ゐ各人を掛て跳騰りつ突然とゐぞ来ぬると見る隨ゐ主僕の間ゐ掛くる
両箇を振捨つ蓦地ゐ土地の茅社の邊へゆく欲と思へば撥消如く忽地見ぞ
ありゐけり。然ば成勝通能ハ目今這奇異神妙ゐ吐嗟とぞ驚避けて眼を定
めて佐と見るに彼大鹿の角ゐ掛りて深き谷底より登り来ぬる其人ハ是別
人ぞゐぞ長橋侍太郎勢業と象船弟弥知量ぞゐ。這方の主僕ハ怡
悦ゐ堪ぎ。ゐ〳〵甚麽と立よりて扶起さまく欲せるゐ勢業も知量
も。俱ゐ渓水ゐ濡まもせぎ。身ゆハ此の疵もゐけれど既ゐ息絶されば成
勝と通能ハ撲傷の氣絶ゐんと猜して俱ゐ師傳の覚ゐ。白打の活を
入れ〳〵かば其術ゐ合る勢業知量云とぞりゐ息生て忽地我ゐ還りつ。
共侶ゐ身を起して先四下を得と見つゐ又成勝と通能を見つ齊一胆を

潰して抑茲ハ那里ぞゐ。我们両箇ハ千仞の谷へ落て死せりと思ひしゐ。
夢欲現欲然るゆそゐ。大江峯張両賢兄ゐ救ひ給ふ欲ゐろ況ゐ。俱
ゐ訝る聲細やうゐ猶ほ〳〵と見かへるとば成勝通能倉矢て。ゐ
長橋象船主心地正可ゐ。ゐりゐる欲和殿等頼美心烈ゐ自て身を渓
谷ゐ放下さ〳〵時留る暇ゐりまらば。うち歎くのミ。彼もゐ〳〵高嶋
よりもこされ〳〵。両箇の伴當字六と可平ゆゐ身の暇を取らせて。蝉く
宿所へ返遣〳〵却我们ハ和殿等の生死を知らぬ亡骸を見も果ぎ去
て开ぶ儘ゐ他郷へいのんいさぞゆそ非除千仞の渓底ゐりまも下らく
便宜得欲と思ふ折ゐ箇様々々如此々々の奇異ありて谷の中より
立升る白雲と共侶ゐ犢児ゐ号紀大鹿二頭和殿等を角ゐ打ち群て谷
より内りと跳出て主等を茲ゐ振捨て撥消如く見えぞりゐた。侍る神

夏山の牡鹿が角もとかぬ間ふる枝のかへてのえ出ふけり
玄同陳人
みちすう

助のあれば。と我們両箇は脚を労せず。和殿等は輒くかて来て且再生の欲びあり。憶ふに和殿等人は勝れ。剣弓心烈ぶを憐れむ土地善神の擁護る欲七鹿山の名虚しからぬ。寔に芽出たしと送代りに語を紹て。言詳に説示せば。勢恭知量は果てそ。めて夢の覚る如くに答る所を知らず。權且て共侶は跪ひて土地の美社の方に向ひて合掌黙禱念じ果て却勢恭ぶいへり。我們命運いまだ竭ず神と人とに帮助られて死なざるを得れども。這儘城内に還り参らば忠と不忠と誣られて縛首を勿られん。然れば今日の事實を具に訴稟さば。俺小父さへ疑れて連累の罪を免がれず。進退惟谷りぬと。いへば知量も沈吟して我們かの折渓底の虱に碎けて命終らば。今の憂苦いるからん慈の神の祐けにより生て甲斐なき身の命。

事の難儀いへまでもあらねど。事實を訴稟うと。阿容々々とかへり参らば漫に死地に就んのみ。孰欲思慮ある者とらん。高嶋大人のいはく。我們が為に疑ることを。彼字六可平が稟をもて。いへ釋まいへば連係せらるべくもあらず。ただ女々〻〻〻云云と千遍思ふとも。今は甲斐なし。只速に他郷へ避て。時の至るを俟んのみといへば勢恭黙頭て。開々理ある言なり。我們は世間廣からず。當國を除くの外。他郷は親族知己の友なり。那里を投て身を措んや。といへを成勝うちぬて両賢兄難を避て。他郷に時を俟んとなるべ安藝の治比に赴く。我父大江弘元は物数なる人小名なれども。善に與し。賢を需め。藝ある者を養ふとい書て。且我兄少輔太郎音就二郎基綱も父に劣らぬ志あり。豫ぬ知りぬ。已治比へ紹めせば。欲びて留められん。他處を索ることかは。といへば通能も俱にいふ。

事の便宜ハそれのミならで俺兄十三屋九四郎ハ浪速ニ名たゝる侠者ヰて善ニ與して死をだも辭せず。生平ニ弱を助け強を挫ぐ。下高者でいへバ和君等先那里ニ赴きて我兄の幇助を借りて水路を安藝へ渡りなバ路の費を省くべし。されども九四郎ハ當春安藝へ赴くべしと豫ねられし事もあれバ。和君等其時ニ後れて九四郎家ニ在らずとも。乾児六市四摠あり。弁が單ハ必在らん。彼等も亦然る者なれバ。事宜く相計ふべし。その義ニ任せなんかし。とのたまて欽が勢恭知量憶ぞ倶ニ額を捐て弁ら幸甚し。いらで教ニ憑らまく欲を。然りとて這里ニて長詮議して再度の追隊の来ぬるニ逢ハゞ。後悔其里ニ達かずけん。先這山を下りてかそといふニ主僕ハ語あひて卒とて倶ニ身を起しつ。土地の茅社の御前ニ跪づきつ合掌して去向の無異をぞ祈りける。

新局玉石童子訓巻之十七終

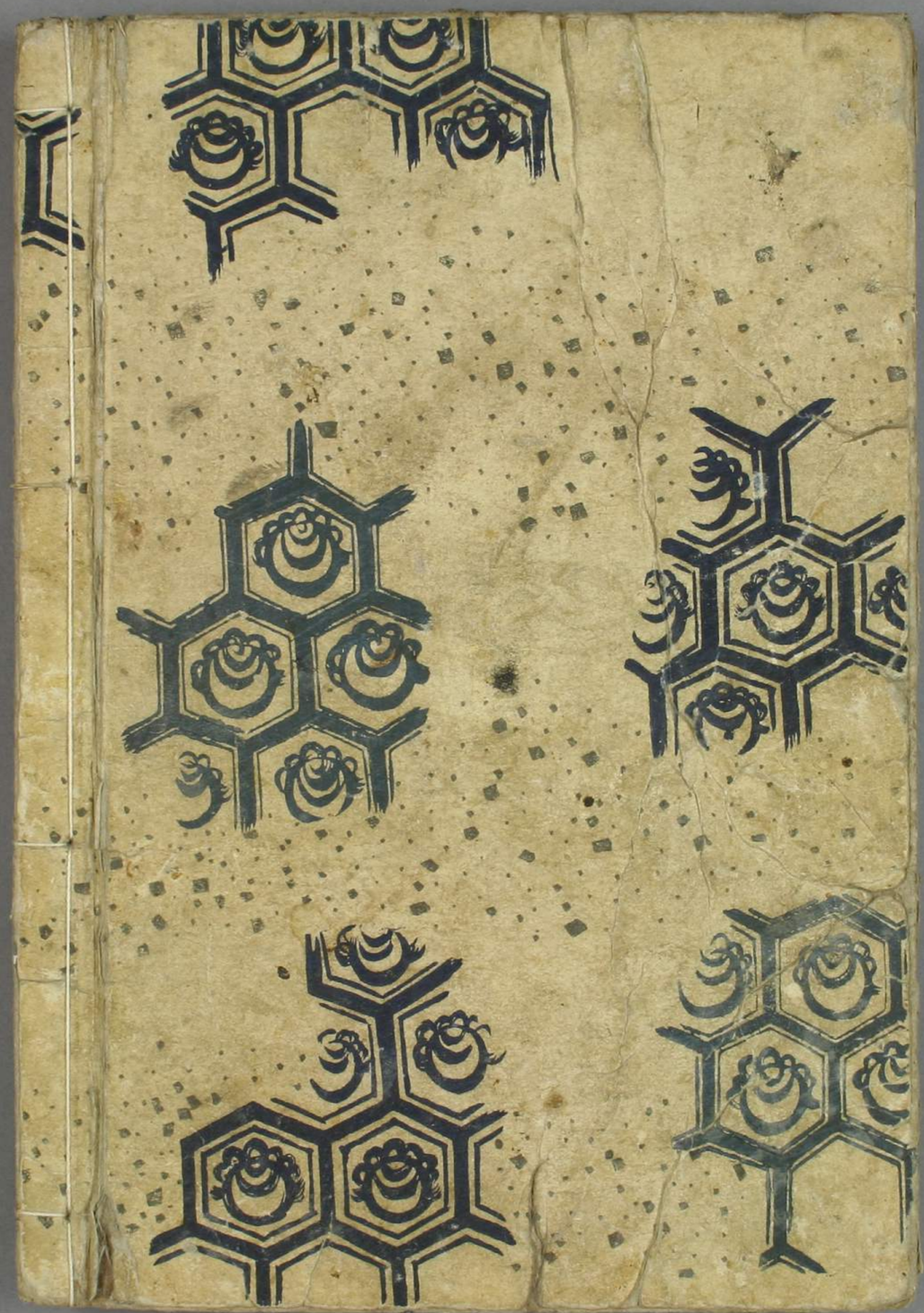
（村田）

清香奇藥 梅の雪 一包七十二銅

第一 酒の毒消によし

[illegible]

化粧水 花橋 六十四銅

[illegible]

賣弘所 江戸大傳馬町二丁目中程 丁子屋平兵衛